

富山 如大地

— 第140号 —

発行人 発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
幽溪 浩 真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ <http://toyamabetsuin.jp/>
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



もくじ

- ・解放運動推進協議会公開講座
玉光順正氏
2~15
- ・研修会報告
15~17
- ・仏教青年会からのお知らせ
18
- ・着任のご挨拶
教区だより
19~20

秋晴れの中^{ごんしゅう}厳修された富山別院報恩講 (2016年10月)

百人百話はたいへん意義のある事業だったと思います。布教は我々僧侶の当然の仕事・義務です。私は百人百話に「教如上人と語ろう」という講座で、出講させてもらいました。教如上人のことが気になるのは、戦国時代の三傑、信長・秀吉・家康と同じ時代に関わって生きて東本願寺を建立した教如上人のことを皆さんにもっと知って欲しいと思うからです。教如上人ご誕生の年、織田信長は桶狭間で今川義元を破り、そして十一年にも及ぶ石山合戦が始まる。信長、比叡山を焼き討ち、長島一向一揆の惨劇、そして石山本願寺は仏敵信長と講和、頭如上人は大坂を退去し紀州^{さきのもり}鷺森へ向かう。教如上人は籠城(大坂抱^{かかえさま}様)を続けたため、父・頭如上人から絶縁される。二年後、織田信長、本能寺で没す。天正十九年八月本願寺、京都(堀川六条)に移転、文禄元年十一月頭如上人(五十歳)逝去、教如上人が本願寺を継承するが、翌年秀吉に退隱を命ぜられる。その退隱を命じたときの理由に「信長様御一類には大敵にて候事」とあります。領主に敵対する門徒百姓の支持を受けていることで、教如上人は一向一揆残党の大將と見なされた。教如上人の言行を伝える側近の記録に「本願寺の家は慈悲をもって本とす」という教如教団の理念を伝える言葉がある。

第十一組 稱永寺 蜷川 達

【富山教区教化テーマ】

私は何を願って生きるのか？ — 親鸞からのメッセージ —

解放運動推進協議会 公開講座（二〇一六年三月十五日開催） 会場 富山東別院会館

聖人の「非の思想」に今を問う

山陽教区光明寺住職
元教学研究所有長
玉光順正氏

こんにちは、ご紹介いただきまし
た玉光です。今回「非」ということ
を中心にお話します。親鸞聖人の思
想として「非」という言葉はとても
大事ですが、しかし日本の文化の中
で「非」という言葉はあまり良い言
葉ではないということがあります。
これからまた使われるかもしれない
「非国民」という言葉もそうですが、
その「非」という言葉にある意味で
は最も大事なことでして親鸞聖人は
使われているように思います。ここ
数年、私は「非」という字にふりが
なをつけています。ふりがなを「ぶ
れない」とつけます。ですから「非
の思想」とは「ぶれない思想」だと

考えています。ただその「ぶれない」
というような、ふりがなは漢和辞典
にも載っていません。勝手につけて
いる訳ですから、分かるのは私と親
鸞聖人くらいかなと思っています。
それほど勝手なことなのですが、そ
ういうこととしてしばらくお聞きい
ただきたいと思います。皆さんのと
ころにレジュメをお配りしておりま
すのでそれに沿って問題提起のよう
な形でお話したいと思います。最
初に

信心とは法蔵の魂（たましい・ねがい）
念仏とはその歴史（いきざま）

とあります。これも勝手に使ってい
る表現なのですが、ここ数年私は信
心と念仏というものをこういうこと
として表現すれば良いのではないかと
思っています。私達は「信心、信
心」と言いますが、その内容とい
うのは具体的にどういうことかとい
うことです。「法蔵の魂」とは、言う
までもありませんが「本願」です。
法蔵の願いです。それを自分のもの
とする。これは法蔵の四十八願です。
それがある意味では、きちっと言わ
なければならぬということがあり
ます。

第一願から第四十八願まで、色ん
な先生の講義があります。私が読み、
あえて私の感覚で言えば、それが思
想と言うよりも、お説教として読ま
れていると思います。それは別に悪
いことではありませんし、とても大
切なことです。しかし、それを思想
として四十八願を捉えることも大事
だと思っています。つまり、私達が
信心というものを自分のものとする
のは、単に説教として分かったとい
うことだけではなく、それが自分の
生き様にまで展開するためには、親
鸞聖人の思想として読むことが必要
ではないかと思っています。四十八願を
思想として読まれているのは、私の
感覚では、曾我先生、安田先生とし
て藤元先生です。もちろん他の先生
も色んなことを教えて下さっていま
すけれども、思想としてこれから読
んでいくことが大切ではないかと考
えております。もちろん他の先生の
ことを悪く言うのではありません。
そういう読み方は、これから本当に
大事ではないかと思うのです。そし
て「念仏とはその歴史（いきざま）」。
そういうものを自分のものとして生



きてきた人々の歴史です。それを「念仏」と言うのです。それは『正信偈』にありますように「法藏菩薩因位時」というところから最後には

七高僧が出てくる訳ですけれども、それはまさに法藏の願いを生きてきた人々の歴史です。それは「念仏」です。これは同時に『正信偈』で使われているのはある意味では、宗祖が七高僧として捉えられた方ですけれども、そうではなく、まさに無名の念仏者がたくさんおられます。で

すから、念仏というのは有名、無名のそういう人達の生き様によって私達のところへ伝えられてきているのです。

今回、富山で嚴如上人のことを考え、その時に富山の廃仏毀釈の時に立ち上がった人々、そういう「念仏者」というものがあります。その人達の生き様はまさに念仏が具体化しているということだと思います。

そのことが私達の現代という時代の中で果たしてそれがあのかないのかという問題を考えざるをえません。別になんと言っている訳ではありません。そういうものとして念仏を考えていけば「信心」とか「念仏」ということをいざまとして考えることができると思います。

そこで親鸞聖人の教えというものが、「念仏」あるいは「信心」という形で表現されてきたということを少し考えてみますとともに、「教団」という言葉を最初に出していますが、私達は真宗大谷派という「教団」を形成しています。「教団」という集

団、そういうものがなぜ必要なのかという問題でもあります。つまり親鸞聖人の教えというものが「教団」として「宗教教団」ということでも

ありますし、何かをしようとするときに人が集まって、そういう共同体、集団というものが生まれます。その時に「教団」というのは何なのかということですが、「思想を運動として表現する集団」です。私達にとって親鸞聖人の「思想」というものを

「運動」として表現する。それを「教団」と言おうと思います。その「運動」としてというのが「念仏」ということです。親鸞聖人の思想を「念仏」まさに「運動」として表現する集団を「教団」と私は言おうと思います。

そう考えますと、そこで具体的に必要なのが教学です。それは「運動の教学」です。先程、関係の教学と書かれていましたが、そういうことも含めて「運動の教学」です。それは、曾我先生の言葉に「還相社会学」があるのです。一九七七年に、曾我

先生の説教集が出たときに曾我先生が一九四九(昭和二十四)年頃、盛んに「還相回向」ということをおっしゃっています。これはおそらく私の勝手な考えでは、戦争中の曾我先生の自分自身のいろんな戦争に対する、ある意味で、そのことをもう一度捉え直すという表現だろうと思います。「還相回向」ということを盛んにその時代に言っておられます。「還相回向」ということをきちんと真宗教学の中で問題にされたのは、その時がおそらく初めてだと思います。その「還相回向」ということについて、色んなことをその時言われたのですが「往相とは個人、還相とは社会」という表現もあります。

様々な表現の中で、一番私自身が「これだ」と思った言葉があるので。「親鸞教学は仏教社会学を意味して、世界中の人を驚かす時が来るに違いない。これは還相社会学である。そんな学問が完成されるのは、必ずしも遠いことではなからう」とまで言われたのです。親鸞教学とい

うものが仏教社会学を意味する。そして、世界中の人を驚かす時が来るに違いない。そして、その学問が完成されるのは必ずしも遠いことではないのです。これは、曾我先生の予

言と言いますか、世界中の人を驚かすに違いないというのには全くできていないでしょう。そして、その学問が完成されるのは必ずしも遠いことではないということです。曾我先生の時間感覚がどんなものか分かりません。ですから、全く曾我先生の言われた言葉が、ある意味でその後の真宗の教学の中で、何の課題にもなっていないと思うのです。ただ、今「還相」ということは色んなところで言われますし、行ったり戻ったりするという形です。親鸞教学がこういう形で世界中の人を驚かさどころか、自分も驚かせてもいないし、隣の人も驚かせてもいない状況です。そうすると曾我先生は嘘を言われたのかと思います。私はそうではないと思います。つまり、それは後の私達の責任だということ。私はそ

れ以降どこかこれらの言葉を気にしながら、親鸞を学んできたのですが、それが、「運動の教学」とか「運動としての親鸞」という言葉になります。

私がそういうことを考えるきっかけとなったのは、キリスト教の解放の神学しんがくです。解放の神学というのは、六十年代に南米を中心として聖書を牧師や司祭という専門家が読むのではなく、普通の人々と一緒に読むという方法です。例えば、私達もそうですけれども、『真宗聖典』『歎異抄』等を読む場合、専門家や例えば僧侶が読んでそれを門徒に話をするという格好ですけれども、実は解放の神学で行おうとしたのは、信者の人と牧師等が聖書を一緒に読むということです。どちらが教えるとか教えないとか聞くということではなく、一緒に読んで一緒に考えるのです。そういうところから始めたのです。かつて蓮如上人の時代の頃は、そういう部分はたくさんあったと思います。ところが今私達の文化の中では、特

に明治以降の学校教育の中で、それは消されてしまいました。先生や講師が話をして後の人が聞いていくという形になりました。これが良いか悪いかは別として、少なくともそれは、もともとあった真宗の学びではないと私は思っています。ひょっとしたら仏教の学びかもしれません。しかし、真宗の学びではないだろうと私は勝手に考えています。

そんな中で、お説教もそうなのですけれども、ご講師がお説教をして一般の聴衆の人が聞いていきます。時には「質問はありませんか」ということがあって、聞かなくてもいい質問をして答えなくてもいい答えをするというのがよくあるパターンです。これではあくまで一方的な見解であって、相互の交流は生まれません。それを行ったのが解放の神学です。しかし、私達はどうしたらそういうことができるのかというようなことをほとんど考えなかったというのが実際ではないかと思えます。もちろん、私自身もそれを気にしながら

ら自分でそういうことをやれたということはありませんし、非常に気になっております。前から言っている表現なのですが「運動としての親鸞」という言い方をしています。例えば「思想としての親鸞」という言葉はよくあります。しかし「念仏」というのは今言いましたように「運動」と私は捉えているのですが、その「運動としての親鸞」ということを具体的にされたのが蓮如上人と教如上人だと思うのです。蓮如上人と教如かりとして、その「親鸞聖人の思想」というものをまさに「運動」として、もっと別の言葉で言えば「念仏」として表現されたといつの間にか考えるようになってきました。もう一つ言いますと、例えば蓮如上人の名号です。もちろん『御文』を書かれたということもありますし、「名号を私ほどたくさん書いたものはいない」と豪語されるぐらいです。たくさん名号を書かれて全国各地にお配りになるのです。今考えてみると徹底し

て名号を書かれたのです。これはひよっとしたら今でも必要なことではないかと私は考えています。その名号というものは例えば親鸞聖人は『教行信証』の中に、

しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたまう。

(『真宗聖典』一六一頁)

という言葉があります。蓮如上人はそのことをしっかりと押さえて、そのことによってまさに名号の運動をされたのだと思うのです。そこに色々なことが繋がってくる訳です。

念仏は無明の酔いを覚ます

(三國連太郎)

これも親鸞聖人の御消息の中にそういう言葉があるのですが、三國連太郎さんという方は徹底して、親鸞にこだわり続けた人です。親鸞の映画を撮られたのがもう三十年前になり

ます。親鸞聖人と同じように九十歳まで生きられて、ちょうど半分の四十五歳前後からは一貫して親鸞を考へ続けられた方です。そんなことをあまり言われていないというより、そのことを紹介する人がいないのが残念なのですが、三國さんはそういう意味では最後まで親鸞の生き様を気にしながら生きようとされた方です。たまたま「念仏は無明の酔いを覚ます」という書を書いてくださったのです。

「念仏は無明の酔いを覚ます」というのはまさに名号の意味です。そのことを考えていきますと念仏というのは何なのか。「念仏(南無阿弥陀仏)は、人と人とを水平に配置することば」だと思っています。これは何かと言いますと念仏することによって、蓮如上人が「念仏」を通して様々な格差を克服したのだと思います。つまり、あの時代は武士や農民、商人、百姓等、様々な人々が蓮如上人のもとへ足を運ばれました。しかし、物質的な格差もあるし、あ

るいは身分的な格差もあります。同時に知的な格差もあったのだろうと思います。そういう様々な格差を克服するものが「念仏」だと思うのです。私達は具体的に「念仏」というものを受けとっているのか、あるいは語られているのかということ。「教学」として表現していかないとダメだと思っています。もちろん私ができていないからこんなことを言うわけですけども、念仏はそういうものであったと思います。そういうのはたらきが「南無阿弥陀仏」の中にあるということです。それからもう一つは「念仏」は私達に公性(パブリック)と純粋性(ピュア)をもたらしませう。「念仏」という言葉はそういう言葉なのだろうと思います。ですから、南無阿弥陀仏なのですけれども「お願いします」ということではなく、「はたらき」というようなことも色々と考えてみる必要だと思ふのです。そして、それは実際にそういうものとしてはたらいてきたのです。

別の表現で言えば「自灯明 法灯明」ということです。これはお釈迦様が亡くなられる前に「亡くなられたら、その後私たちはどうしたらいいのでしょうか」と聞かれた時に釈尊は一つには自灯明「自らを灯火として生きていきなさい。他のものによってはだめですよ」と言われました。もう一つは法灯明、自らを灯火として生きていくために「私がこれまで説いてきた教え(法)を灯火として生きていきなさい。他のものによってはだめですよ」と答えられました。そういうことが、「自灯明 法灯明」なのです。それを大事なこととして「自分で考える人間を大量に生み出した」のが蓮如上人の「運動」だと思っています。それは具体的に「共学・共生・共闘」と書いているのですが「共学」というのは信仰です。信仰とは共に学ぶ、そういう場所です。そして「共生」というのは生活です。共に生きるという言葉はよく使われます。もう一つは「共闘」です。共に闘うというのは

別の表現で言えば「運動」です。ですから「共学・共生・共闘」ということが、具体的に蓮如上人の時代にはあって、そして、時には一揆という形になって広まってきたのです。そういう運動は、今でも例えば原発事故とか安保法制問題というところに名号を置くことによって運動が変わる可能性はあると思います。具体的にはどうやったら良いかということとは、もう少し考えなければなりません。が、教学的にはそういう形ではたらくものが少なくとも名号だというのが親鸞聖人の受け取り方ではないかと思えます。

そして、もう一つは「非僧非俗なる僧伽運動」という言い方をしております。そこに私は「ぶれない思想」としてありますが、それは同時に「一人になることのできる宗教」で、親鸞聖人の教えというのは、誰が聞いてもきちっと聞けばそれぞれの人が一人になることができるのです。仲間になるのではないのです。一人になる事ができるのです。そういう

教えだと考えています。そして一人になる事によって人と人が繋がっていくのです。団子ではなく、おにぎりで。おにぎりは一粒、一粒別々です。ところが団子になりたがるのです。それを「みんなになる」と言うのです。次に

知識人はいつも、孤立するか迎合するかの瀬戸際に立っている

(サイド)

という言葉があります。この方はクリスチャンですが、パレスチナ出身の方である意味、知識人として最高の人だっと思っっているのですが、二〇〇三年亡くなられました。サイドの本にしては非常に短い、読みやすい短編の『知識人とは何か』という本があります。これは念仏者のことを言っていると私は感じました。「知識人とは亡命者にして周辺の存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である」という

言い方をしています。知識人とは亡命者であり、流罪になったということとです。そして、京都に帰らずに田舎の人々と共に生きた人です。また、無名と同時にさらに権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手です。そういうものを念仏者と言います。ですから、念仏者が有名になったら念仏者ではなくなるのです。無名で同時に権力に対しては真実を語ろうとする言葉の使い手です。そして「知識人はいつも、孤立するか迎合するかの瀬戸際に立っている」のです。

孤立するか迎合するかということを考えてみると私達の日常でもそうです。例えば、門徒の方との関係もそうです。あるいは住職との関係もその時にどちらに立つか、迎合するか孤立するかということがいつでも問われているという感覚です。感覚が鈍くなってくると、いつでも迎合してしまいます。なかなか気付かないのです。それが「みんなになっちゃう」ということですね。です

から、ある意味で大事な言葉だと思います。できれば、この言葉を書いて冷蔵庫の横にでも貼っておいて下さい。「知識人(念仏者)はいつも、孤立するか迎合するかの瀬戸際に立っている」という言葉と「みんなになるな ひとりになれ」という言葉を貼っておくとかなりおまじないの効果がありません。それと同時に「非」という言葉と関係あるのが「権力にならない思想」です。

「非の思想」というのは、毎年二月に「ナムナム大集会」というのをやっているのですが、昨年は「みんなになるな ひとりになれ」というテーマでやりました。その時に中山千夏さんに久しぶりに来てもらったのです。後で彼女が『琉球新報』にコラムを連載しておられて、その時に非常に面白いことを言っているのです。途中からなので分かりにくいかもしれませんが、

いやしかし、意外にも体制・権力
の方向が個々にやさしい平和な社

会なら？それでもやはり共に進む
 ミンナにはなるまい。国策の進撃
 力はとてつもなく強い。私ヒトリ
 が抜けたって、行きたい方に行く
 だろうから心配ない。だからミン
 ナにならない、ひとりになる。

(中山千夏)

という言い方をしています。たとえ、
 自分にとって良い政権ができたとし
 ても、自分はその側に立たずに一人
 でいるということ。これがまさに
 に非の思想、親鸞の思想ということ
 です。これは外からキチツと支える
 ということがあります。ですから、
 権力というものにならない思想があ
 るのです。そのことをもう少し言い
 ますと「非僧非俗の集団」というの
 は一人だけ集団です。それは必ず
 人と繋がっていくのです。ここでは
 「孤立」という言葉を使っています
 が「孤立」というのはまさに一人が
 一人として繋がっていくのです。そ
 ういうものがある意味で親鸞の「非
 僧非俗」の宣言です。『教行信証』

後序に、

主上臣下、法に背き義に違し、忿
 を成し怨を結ぶ。これに因つて、
 真宗興隆の大祖源空法師、ならび
 に門徒数輩、罪科を考えず、猥り
 がわしく死罪に坐す。あるいは僧
 儀を改めて姓名を賜うて、遠流に
 処す。予はその一なり。しかれば
 すでに僧にあらず俗にあらず。こ
 のゆえ「禿」の字をもって姓とす
 (『真宗聖典』三九八頁)

こういう言葉が書かれております。
 これはまさに「非僧非俗」というこ
 とと一人ということキチツと言っ
 ているのです。一人だけ集団とい
 うことが言われているのです。それ
 は別の言葉で言えば『歎異抄』の中
 にある「親鸞は弟子一人ももたずそ
 うろう」。これは何を言っているか
 という「仲間はずれを作らない仲
 間作り」です。これは一人になるし
 か出来ないことです。仲間はずれを
 作らない仲間作り、仲間作りをしま

すと必ず仲間はずれを作ります。お
 寺参りでも、一緒に行こうと言えば
 それは排除される人があったりする。
 「仲間はずれを作らない仲間作り」
 というのはそれぞれが一人。それが
 「同朋社会」ということと関係して
 いる。

そういうことは、実は教如上人と
 いう人の「いきざま」でもあったと
 私は考えています。教如上人とい
 方が、東本願寺を作られたのはそん
 なに簡単な事ではない。教如上人が
 徳川との関係が出来たという状況の
 中で豊臣と徳川の関係があんな形に
 なっていくわけです。しかし、徳川
 が権力を握ったときに教如上人に
 「あなた本願寺を継ぎませんか」と
 という話があったということがありま
 す。その当時の徳川家康の力ですと、
 すぐに准如上人をやめさせて教如上
 人をトップにもってくるようなこと
 は簡単であったのです。しかし、そ
 れを教如上人自身が拒否したとい
 うことがあります。東本願寺を建てた
 のは、それまでの本願寺は「親鸞の

思想」と外れているという判断だと
 思います。もう少し細かく色々な勅
 命講和とか様々なことが考えられる
 のです。そういうことの中でこの流
 れのままではダメだと教如上人は判
 断したということです。それで布教
 の自由を獲得して大変だけれども禄
 も貰わないでそういう判断をした。

それはまさに「非僧非俗」というこ
 とを具体的に、教如上人はその当時
 の門首という、そういう形の上での
 判断であったのだろうと思うのです。
 そのことを信長・秀吉・家康との関
 係に緊張関係を持ったままずっと考
 え続けたのです。そういう運動だと
 思うのです。ですから、それが蓮如
 上人・教如上人、それから厳如上人
 の時代もここで戦った門徒の人達を
 はじめとして仏教徒、真宗門徒、真
 宗僧侶の一人としてそういう願いが
 あったのだと思います。もう一つ大
 事なことは、例えば蓮如上人にして
 も親鸞聖人にしても教如上人にして
 も、また厳如上人の時代の富山の人
 達もそうです。これは政治との対決

なのです。具体的には政治と対決するかたちで信というものを守ってきたのです。政治と宗教とは別の問題ではないのです。政治を政治としてではなく、政治を宗教的課題として受け止めたということがあるだけの話です。しかし、私達は特に明治以降、教育の中で政治と宗教とは違うものだということになってきたのです。非常にこれは面倒な問題でもあります。

次に、一橋大学の学長もされた上原専祿^{うえはらせんりく}という方の言葉ですが、この方は日蓮宗の信者でもとても大きな仕事をされていきました。それでも日蓮宗の宗務所で確か一回だけ話をされたのですが宗務所からはある意味拒否されました。本当のことを言う^うと拒否されるのです。上原さんは色々な縁の中で『親鸞認識の方法』という論文もあります。大事なことを仰っておられますので、若い人には学んでいただきたいと思います。また、別の本の中では次の様に書かれています。

経済や産業や社会の問題をもひっそくめて、それが生きた形で動いている全体を政治ということではぼってみるならば、政治は「現世的なもの」の集約であるといえましょう。そして宗教の宗教性を最も発揮できるのは、こうした意味での政治に対決するときにおいてであると、私は思うのです。宗教は政治に従属するものでもなければ、宗教問題は結局政治問題に帰着するものでもありません。しばしばいわれますように、宗教は政治ではなく、また政治であってはならないのであります。しかし、政治とのかかわりあいを抜きにして、いったい宗教がその宗教性を実現することが可能かどうかという^うことを、宗教自体の側の問題として考えますとき、私としましては、どうしても政治との対決の重要性を強調せざるをえないのですね。

政治の問題を、具体的に現実的に掘りさげてゆくこと自体が安心を確立する道であり、さとりに至る

道であるとする立場が、教義的にも信仰的にもなりたちうるわけだと思えます。

(上原専祿)

念仏者とは言いませんけれど、念仏者の表現なのです。つまり「政治の問題を、具体的に現実的に掘りさげていく事自体が安心を確立する」のです。そういう運動です。単に賛成か反対かという運動ではないのです。まさに真実である南無阿弥陀仏に託す運動です。やはり、普通の運動と



は違うものがあるということです。ある意味では、やってみなければ分からないというところもありますが、上原さんは具体的にそういう事を言っているのです。それは「宗教の宗教性を最も発揮できるのは、こうした意味での政治に対決するとき」です。つまり、私達は「穢土^{えいど}」と言いますが、「穢土」に対して「浄土」つまり、願生^{がんしょう}浄土です。浄土を願って生きたら、当然穢土では戦わざるを得ないので。当たり前の話であって、特別な話ではないのです。私達は浄土を願って生きる、本願を生きるのです。つまり「信心」の問題です。「信心」というところに立つのです。そして、念仏です。ここにあるように政治の問題や経済の問題、「本当の政治とは何なのか。本当の経済とは何なのか。本当の科学とは何なのか。本当の医学とは何なのか」という事を考えながら生きるのです。それが念仏です。

これは『方丈記私記^{ほうじょうき}』に書かれている言葉ですが、

人は流罪に処せられてはじめて民衆を知るのである。言っておきたいのだが、この流罪ということと民衆を知るといふことは直通したことである。論理が少々飛躍すると見えるかもしれないけれども、ものを考えることを業、あるいは業とするほどにも思いがった者が、罰せられずして民衆を知ったりすることが出来るわけではない。

(堀田善衛)

この表現は、親鸞に関して書かれている文章の一つですが、「流罪に処せられてはじめて民衆を知るのである」。これは何を言っているかというところ、浄土真宗はいつから始まったかということ。皆さんはどう考えられますか。例えば、立教開宗ですが、一九七三年には立教開宗七百五十年がありました。聖典ですと一三三六頁になりますが、最後の年表のところですが、元仁元年、

親鸞、当年を末法に入つて六八三年と『教行信証』に記す。

とあります。つまり『教行信証』の草稿本が完成したのは化身土巻にこの言葉があるのですが、一二二四(元仁元)年が、宗派では立教開宗の時だと言ふのです。つまり『教行信証』草稿本の完成の時です。

また、考え方によると、親鸞が法然の元に入つた一二〇一(建仁元)年、親鸞聖人が二十九歳の時ですが、

親鸞、これまで堂僧を勤めた延暦寺を出て、六角堂に参籠、聖徳太子の夢告により源空の門に入る。

これは、「雑行を棄てて本願に帰す」ですが、この時にある意味で真宗が始まったという考えることもできます。

そして、もう一つは流罪の時です。一二〇七(承元元)年、

専修念仏停止の院宣くだる。源空とその門弟処罰される。親鸞、越後へ遠流。

とありますが、私はこの時が浄土真宗の立教開宗だと考えております。つまり、それは何かと言ふと、法然上人の元で学んでこられた念仏が、それこそ流罪となつて、名もなき人々の出会いの中で親鸞聖人の『教行信証』が作られてくる訳です。

よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり

(『真宗聖典』六二七頁)

親鸞聖人の「よきひと」とは法然上人です。それは当たり前の話ですが、親鸞にとつての流罪以降の「よきひと」とは誰なのでしょう。河田光夫さんもおっしゃっているのですけれど、田舎の人々、要するに被差別民衆という言い方もされています。そういう人々が親鸞にとつての流罪の後の「よきひと」なのです。そういう人々から学ばれたという捉え方も出来るだろうと思ひますし、私もそうだと思うのです。八木晃介さんも近著『親鸞 往還廻向論の社会意図』の中でも書かれています。浄土真宗

というものはそこから始まつたという捉え方も出来ると思ひます。そういう意味で流罪ということの意味は、私達が親鸞を考える場合にとつても大事な事だと思ひています。

次に「不安に立つ」というタイトルがあります。この「不安に立つ」というのは「三極構造」ということで、これは莊子の「渾沌」という神話を元にして考へているのです。

南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇う。渾沌、之を待すること甚だ善し。儵と忽とは、渾沌の徳に報いんことを謀りて曰はく、「人皆七竅有りて、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たん。」と。日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死す。

『渾沌』(莊子)

という言葉があるのですが、神話ですから世界が始まる前です。世界が三つに分かれていて儵と忽というの

はある意味で人間を表すのです。人間というのは七つの穴があってそこで視聴食息するのです。つまり目があって、耳があって、口があって、鼻があるのです。七つあってそこにあるように見たり、聞いたり、食べたり、息をしたりするのです。それでは生きていくのです。ところが渾沌にはそれがありません。それで人はみんな七つの穴があるのに渾沌にはないから、それでお互いにこの儻と忽が日替わりに一日に一つずつ穴を開け三つ、四つ、五つ、六つそして七つ開けた七日目に「渾沌死せり」ということです。儻と忽どちらも人間を言うわけですけども、人間がこの渾沌を我々と同じ様に食べたりする楽しみが出来るだろうというときに渾沌が死んだという話です。これは、

秩序に属しないものは、ただ秩序に属しないというだけで、秩序に安らぐひとびとの生を足もとからおびやかす。かれは秩序の認識と秩序への帰属を強いられる。秩序

が善であるならば無秩序は悪であり秩序が世界を支配するためには、渾沌は死ななければならぬ。

『渾沌の海へ』(山田慶児)

と山田さんは言っているのです。要するにどちらも人間でつまり秩序という風に言いますけれどもこの渾沌というのは、そういう意味では秩序を乱すものとしてある。これは何を言っているかというところ「一極構造、二極構造、三極構造」とあるのですが「一極構造」というのは、グローバルイズムあるいはファシズムみたいなものです。独裁主義というのはまさに「一極構造」です。多数の横暴と言ってもいいのですがそういうものです。今現代もこういう風に色々な事になりつつあるのです。それから「二極構造」というのは白か黒かということ。善か悪か、損か得かというふうな、マイナスかプラスかという、日本ではこういう「白か黒か」「善か悪か」というような分け方というのは非常に盛んになっています。そうするとこれは善でなけ

れば悪だし、損でなければ得です。どちらかを選ぶというような在り方、健康と病気ということでもいいですし、勝つか負けるかというふうなこともそうです。敵か味方かとかです。二つに分けて「二極構造」があるのです。しかしそれに対して「三極構造」というのはその真ん中に真と偽とします。これを例えばお札で考えてみてください。本物のお金と偽札とは違うかという違和感のないです。どちらも本物と言うから偽札になるでしょう。要するにどちらも一緒なのです。その時に、偽ではなく仮です。「真偽の仏弟子」というものがあります。「仮」のはたらしきです。「化身土巻」というものが何を言っているかということ。親鸞聖人の「化身土巻」とは、実はそこに私たちの生きている場所があるのです。例えば、偽から真へというふうな転換というものがあります。オープンスペースです。

カンディンスキーという画家の言葉ですが、彼は「音同士の葛藤、失われた均衡、崩壊した原理、予期し

ない太鼓の響き、大きな疑惑、明らかに目標を欠如した努力、明らかに引き裂かれた衝動と憧憬、統一を崩す鎖と籠、対立と矛盾。こうしたものが僕らのハーモニーである。こうしたハーモニーに基づくコンポジションは、色彩の形と線描の形の合成であるからだ。二つの形はそれぞれ別個に存在し、しかも内的必然性に基づいて取り出され、そこに生まれる共通の生命の内に絵と呼ばれるひとつの全体を形成するのである」と。要するに対立と矛盾のハーモニーという言い方です。それが絵を生み出すのです。こういう発想はとても大事だと思います。日常的に生きていることは、真や偽ではなく、そこをきっちり押さえたのは親鸞聖人にとっての化身土巻ということ。そのことを藤元正樹先生の言葉ですが、

親鸞が求めた教学は御承知のように化身土の末巻に展開される時代批判であります。時代批判というような言葉ではどうももっと明確

に言い当てられないほど厳しいものでありまして、むしろあそこで親鸞が求めておるものは人間の変革であり、時代の変革をもたらすような批判であると申しても過言でないと思います。およそ信仰が人間を変革し、時代を変革する力をもたなければ信心とよべないものであろうと思います。信心ともよべないし思想ともよべないものであろうと思います。思想をもって人を変え、思想をもって時代を変えるというときにはじめて思想のもつ力というものが親鸞によって大行という言葉で示されてくるわけであります。

(藤元正樹)

とあります。「大行」とは「念仏」ですね。「念仏」というのは、人間を変え、時代を変え、それが親鸞の言う「大行」です。人を変えるのは、自分が変わる、それによって、人が変わることによって時代も変わる。そういうものを「念仏」と言うのです。自分も変わらない、時代も変わ

らない、我々は「念仏」していないということ。そういう「念仏」を親鸞は「大行」と言うのです。

「一切の無明を破す」とか「一切の志願を満てたもう」とかその通りですね。果たして、私たちは本当に親鸞聖人、蓮如上人、教如上人、厳如上人、そういう人達が伝えようとしてこられた「念仏」を受け止めているのでしょうかという問題になります。

三十年くらい前になりますか、安田先生と日蓮宗の教学者茂田井教亭さんとの対談がありまして、丸山照雄おさんが編集されたものが『不安に立つ』というタイトルの本です。その頃から、不安に立つという言葉がずっと気になっています。それが今の渾沌という言葉に繋がるのです。私達は不安には立てないのです。不安が問題になってくるのです。それが、井出英策いという経済学者の言葉ですが、

人びとの生活不安こそが、現在の安倍政権をささえる原動力であり、

この不安こそが、右傾化を人びとに甘受させる重要な素地を形づくっている。

(井出英策)

とあります。つまり生活不安です。これは他人のことではなくお寺もそうです。話をしたり、聞いたりしていると、この生活不安ということが具体的に不安は不安として語られるのです。この先いつたいたいなるのだと。みんな不安を避けたいと思っている。ある意味当たり前です。安田先生は「不安に立つ」という表現をされているのです。「不安を避けたい」ということと「不安に立つ」ということは少し違います。そういう時に渾沌という言葉は大事な言葉なのです。同じような言葉があります。

安倍内閣を支持する日本人の過半数は「景気が良くなること」にか関心がないのだ。この内閣に対する表立った批判の声がほとんど聞こえてこない理由を考えると、

あっけに取られてしまう。「アベノミクス」を言って展開する内閣を批判することは、「あなたは景気回復を望まないのか」と問われてしまうことにつながるからだ。誰がそれを言うわけでもない。なんとなくそんな雰囲気になっていて、口がつぐまれてしまう—そのような構造になっているとしか思えない。

(橋本 治はしもと)

とあります。これは時代の見方としてはその通りです。ところがこういうものを読むとそういう風に考えるのです。考えるというか、それに口をつぐむのです。ここがメディアの問題です。ある意味では良心的なのですがそのことが逆に悪くしていくのです。ですから、本当の意味での「真宗のメディア学」みたいなことが大事なのです。そんなこともやはり我々は考えなければならぬのです。今、「真宗のメディア学」と言いましたけれども真宗の政治学とか真宗の経済学とか、例えばここにあ

りますように、

あえて簡単に言うならばそれは、
経済成長こそが人々を幸福にする
のであり、お金こそがこの世の中
の最も重要な価値であるという、
ここ数十年間に世界中に流布した
「物語」の結果だということであ
る。

(平川克美^{かつみ})

という言葉です。つまり「お金こそ
がこの世の中の最も重要な価値」と
いうことが、ここ数十年間にできた
のです。昔、今のようにカネ、カネ
とは言いませんでした。ある意味で、
今の方がよっぽどみんなお金を持っ
ているのです。持てば持つほどカネ、
カネと言うようになってきたのです。
それはまさにそのように作られてく
るのです。私たちが本当に「経済学
とは何か」ということを学ばなけれ
ばならないのです。人々の生活不安
が安倍政権を支えているという言葉
を紹介しましたが、みんなバラバラ
です。人間関係がドンドン切られて

いきます。それが「不安」というこ
とと繋がっていくのでしょうか。この
「不安」はドイツ語でアングストで
す。これはもともとギリシャ語のア
ンコスが元の言葉らしいのです。こ
れは何かというところの意味は「狭
くなる」ということなのです。「不
安」ということの元々の意味は「狭
くなる」ということです。そうする
と不安を克服するためには広くした
らいいのです。つまり「開く」とい
うことです。もちろん単純にはいき
ませんけれども、そういうことで私
達の社会、自分が生きている環境を
考えますと、本当に人間関係が狭く
なるというか、個人的になるとい
うか、そうなってきたと思います。た
だし田舎と街は少し違うと思います。僕
は田舎に住んでいますからある意味
では付き合いは非常に濃くと言え
ば濃く、面倒と言えれば面倒です。し
かし面倒なことをドンドン切り捨て
いくという社会、そのことがあたら
かいいことであるかのように思っ
てしまいます。例えば、街の方だとお
葬式となっても相談する人がいない

のです。そうするとネットで調べた
りします。一番簡単にしたらという
ことで直葬になってしまいます。そ
ういうことがドンドン出てきました。
そこでは人と人との関係がもう見え
ないというか、それを切って当たり
前になってきています。そういうこ
とがドンドン進んでいくと、まさに
そのこと全体が「不安」を生み出し
ているということがあると思います。
私達がしている一つひとつのことが
実は「不安」を生み出しているの
です。その一方で、「不安」が困ると
いう風に考えています。矛盾したバ
ラバラなことをやっているというよ
うな文化があります。
その次に、映画監督の富田克也^{とみたかつや}さ
んという方は、

この社会はもう続かないかもしれ
ない。何か新しい考え方、価値観
に変えていかないといけない。三・
一一もあり、人々がやっとなんか
ふうに感じ始めていた。その感覚
を再びカネの魔力で封じ込めよう
というのがアベノミクスじゃあり
ませんか。
(富田克也)

という言い方をしています。つまり、
先程の橋本さんの言葉も含めて、例
えば「アベノミクス」とか経済政策
が大事だと言います。そこに経済と
いう言葉を使った途端「不安」とい
うことに繋がっていくのです。です
から私達にとって「不安」というの
は経済的不安ということになります。
宗教的不安ではないのです。このこ
とは、もう少し色んな形で考えてい
かなければならないところでは
ないか。「教学」です。しかし私達の
「教学」の中には、そういう発想が
ないし語れる人があまりいるとは思
えません。例えば仏教の六波羅蜜^{ろくはらみつ}の
最初は布施^{ふせ}です。では今の時代にお
ける布施とは何なのでしょう。か。
「トリクルダウン」という言葉が
あります。「滴り落ちてくる」とい
う意味です。つまり、金持ちがド
ン金を持ったら、その余り分が下
へも落ちてくるだろうという理解で
す。これは元々アメリカで「そんな

トリクルダウンというような人をなめたような言い方をするな」ということから始まったそうです。ダメだという言い方でその言葉が始まったのです。ところが「トリクルダウンがあるから大丈夫だ」と安倍政権は言うのです。全く違うのです。けど、そこに私達が本当に例えば布施と、そこを仏教経済学としてということが出来ていないのです。ですから、いくら遅くても気が付いたところから始めるのが仁義なのです。だから、そんな色んな思いがあつて色んな人達が何か考えているのです。そういうことを一緒に考える。門徒も寺の人も、あるいは専門家の人もそういうものを「真宗の教学」と言うのだと思います。坊さんが、何か本だけ見て、「あーでもない、こーでもない、大事なことだ」と言うのではなく、少なくとも真宗の教学というのは開かれた教学ということがもともとあつて、そういう伝統がずっとあつたのです。しかし今言いましたように、明治以降、急速に日本の文化の中で壊されてきた様に思うの

です。

NHKをはじめとする大手メディアの予想通りというよりも、誘導の通りになった二〇一四年十二月の衆議院選挙は、投票率や選挙制度の問題も含めて全ての有権者のほぼ17%で議席の60%を超える数を自民党に与えた。アベノミクス、この道しかないという、軽い言葉は主権者としての「国民」を消費者に変えてしまった。主権者とは自分で考える人々のことを言うのであろう。それは考える主体はこちらにあることであり、消費者と成ってしまえば、選ぶことには間違いないのだが、主体はあくまで向こう側にあつてこちらは考えるのではなく、ただ選択させられると

いうだけのことになってしまつて商品となつてしまつている。ただの商品なら、買つてしまつても都合が悪ければ返品ということもあるし、使わないということもできるし、処分もできる。しかし、そ

うはいかないだけでなく、その商品が私たち「国民」のみならず、他国の人や、あらゆる分野に迷惑をかけることだつてある。では、どうすればいいのかということになるが、私たちそれぞれが自分で考える人になるしかないだろう。自分で考えるところと、自分で考えたつもりと、自分では表現のだがその違いが的確には表現できないが、自分で考えたつもりの場合はどうしても知らず知らずのうちに他人まかせになつてしまひ、結局は「さしあつたの無難を願う」ということにしかならないのではないだろうか。

これは、昨年はじめに書いたものですが、つまり選挙であっても商品を選ぶのです。選んでしまつたら、この商品は「しまった」と思つて捨てるわけにはいかないのです。そういう状況が実際にあると思います。そういう商品と商品は、これはメディアがそうですが、例えば、特に安倍政権になつてからです。NHKをはじめ、

今盛んに色んな閣僚が報道各社に脅しをかけているのです。これは、当然のこととしてズルズルと行きはじめています。ある意味では、先が見えていくというか、そういうこともあるのです。全くそうではない部分もあるかもしれない。しかし、そういう状況の中で私達が「念仏者」として生きるということが求められているわけです。

幸いに例えば大谷派は、色んなことに対して声明を出しています。大谷派の間でもそんなことをする必要はないという意見もあります。しかし、教えということを中心にして、信心や念仏とか法蔵魂を伝えてきた人々の歴史とか、そういうことを願う人達にとつてはとても大事なことです。それを皆が、フォロワーしなればならないのです。ところがなかなかそれが出来ないのです。大谷派が色んな声明を出しているようなところが、少なくとも門徒の人々の中間半分以上でも浸透すれば変わると思いますが、それが門徒以外の人にも伝わらないのです。今はほとんど伝わらない

と思います。僧侶の中にもどれだけ気にしている人がいるでしょうか。そのように教団がなってきたりわけてです。これは単にそうなってきたりだけでなく、慣らされてきたりということがあるのです。ですから、非常に面倒と言えば面倒なことなのですが、今言いましたように、不安を、開くことや繋がることによってそれを克服していくということがなければと思います。少し考えたいし、考えて欲しいと思います。また、具体的に自分で出来ることをして欲しいのです。隣の人に「私はこう思いますよ」と伝えるのです。そういうことを始めることが大事だと思います。

大乘仏教は、釈尊以前の仏教でしょう。阿弥陀の本願なんていうのは、釈尊以前の仏教だということをお皆さんはよく聞いていただきました。こういうことが、聞思するということである。これが「聞其名号信心歓喜」の意味である。釈尊がなければ、釈尊以前の仏教はあ



りません。釈尊があつて、仏道を行じ、成道じょうどうされた。成道をなされて、釈尊は、ご自身のさとりをお説きなされた。その釈尊の説法というものを聞くならば、釈尊以前の仏法とはどういうものであるか、ということをお必ず思い出さなければならぬ。思い出すべきものであると思う。

「法蔵菩薩」(曾我量深)

こういう言葉があります。これは曾我先生が米寿を迎えられた時の記念

講演の言葉なのです。親鸞聖人の著述を見ると『教行信証』は別として、七十五歳から九十歳近くまで色んなものを書かれているのです。そういうことを考えながら生きていくかどうかです。つまり、発想が違うのです。現代の私たちとは違うのです。そうさせられてしまっています。ですから、テレビを見ると健康番組やグルメ、旅、お笑い、スポーツ等々、ばかりなのです。つまり、自分で考えるということがなくなってきているのです。これまでは浄土真宗というのとは違う文化だったのです。私たちの仕事というのは、真宗教団においては世界の文化革命です。本当の意味で浄土真宗というのは文化革命です。そういう文化があったのです。日本の中でも特殊な文化があったのです。現代はテレビの中で皆同じになつてきたのです。ですから、ある意味では真宗の文化や非の思想ということが力がなくても表現していくだけでいいのです。これは私たち教団の力だけではとてもできません。

東西併せても無理だと思えます。ですから、外の人達や同じように考えている人達の力が実は浄土真宗なのです。これが先程紹介しました「釈尊以前の仏教」なのです。この言葉に出会った時は「何のことなのか」とビックリしました。自分の中ではそのことばかりを気にしていたわけではないのですが、特に曾我先生の言葉はずっと気になるのです。自分の決着をつけるのです。私は五、六年前にこの言葉に対して自分なりの決着をつけました。それは何かと申しますと、釈尊以前の仏教というのは要するに親鸞聖人は、浄土真宗という表現で、浄土真宗を仏教からも、宗教からも解放(開放)したということなのです。つまり、もう少し表現を変えると浄土真宗つまり親鸞聖人の教えは、いわゆる仏教でもなく、いわゆる宗教でもないのです。それが浄土真宗です。ところが私たちは最初から「仏教だ」「宗教だ」という風に考えるのです。釈尊以前の仏教はそういうものではないということです。そうしますと色んな人達が

浄土真宗を語っています。その人達もそれを願いながら生きているのです。そういう人達と連帯することを急がなければならぬと思います。

教学というものは、時代とともに歩まなければならぬ。時代に影響されたら、また時代に影響しかえしてゆかねばならぬ。

「大乘の魂」(安田理深)

という言葉があります。つまり、教学は時代とともに歩むのです。私達の教団は、例えば御遠忌等で色んな知識人と言われる人達や物事を一生懸命考えておられる人達を呼びますが、言いつばなし聞きつばなしなのです。そこに交流がないのです。そうではなくて、お互いに語り、聞くことによってお互いが変わるのです。言いつばなし聞きつばなしというのは、聞いたことを使えるところだけ使うのです。しかし、交流ができればめたらお互いが変わるのです。現代の知識人もそれを待っていると考えられます。「非」という字は辞書に

は「相背く」とあります。これは鳥が下を向いて飛んでいる時の羽の形を現しているのだそうですが、親鸞の「非の思想」は権力にならない、権力になれない思想だと思っています。

そういうことから今回「非(ぶれない)」ということを考えました。漢字にはそれぞれに意味があって、その事を基本にしながら『教行信証』等を読むということができていない気がします。真宗の経済学、真宗の政治学、真宗のメディア学、真宗の教育学、真宗の科学、真宗の医学等、物理学者の方も仏教のことを勉強している人はたくさんいます。そういう人と私たちは対話ができないのです。こちらに力がないからです。そんなこともこれから急いで慌てなくてもいいのですが、「急ぎ念仏して」と言います。「慌てて念仏して」とは言わないのです。ぜひ色んな所からそういう声を挙げていただきたいと思えます。ありがとうございます。

(了)

研修会報告①

「第五十六回 児童研修大会」開催

テーマ 『人と自然とふれあおう!』 会場 牛岳ユースハイランド

【8/8~9】



カルタゲームの様子

今年度の児童研修大会に自分は初めて参加しました。九組が担当ということで「牛岳ユースハイランド」での一泊二日の研修となりました。天候にも恵まれ怪我もなく無事終えることができて良かったと思います。初日は別院本堂で子供達と正信偈の練習をしました。研修大会後の子供達のアンケート結果には、二十四人中四人が「お経の練習」と書いてあり、真面目に練習していたので大人になってからも興味をもって読んでも欲しいと思えました。今回は大

の反面、子供も班担に懐きやすくなり他のスタッフとの距離が開いてしまったと感じました。野外で遊ぶゲームやカルタゲームなどでの交流はありましたが、カルタ作りなどの班での行動でも積極的に触れ合ってお互いに交流を深めていくことが必要だと思いました。大学生の方々からも「また機会があったら参加したい」という声があり、若い人とのつながりを大切にこれから活動していきたいと思えます。



参加者、スタッフの集合写真

第九組 寶林寺 正因彰人

研修会報告②

「富山別院報恩講」厳修

会場 富山別院本堂

【10/6~8】

今年度も親鸞聖人はじめ、念仏の教えに生きられた先達の御恩の深きことを知り、その恩徳に感謝し、まことを尽くすことを期する富山別院報恩講が、信明院鍵役にご出仕を賜り厳修されました。



富山別院報恩講の様子

式支配所、外陣役、掛役等が身を挺してことにあたりました。殊更痛感したことは、出仕者も含めて、「儀式作法講習会」の重要さであります。声明練習、着座、起座、出仕、退出、挿鞋の扱い方、和讃本の扱い方等に各自が心得を持って望まねば、「報恩講」自体が成り立たないということになります。

さて、私ごとになりませんが、鍵役の御先役を仰せつかりました。



満堂となった本堂

「報恩講」の結願日中の法要も終わり、鍵役が御挨拶の準備の間、後堂の椅子にお座りのときに、私に「今日はよく雨がふりますなあ」と話しかけられ、続いて、出仕者や掛役等に「私の挨拶が終わるまで後堂で待機しなさい」との暖かい言葉に思わず頭を垂れていました。富山別院報恩講を終えて思うことは、現代の社会は、知識や情報は多いが、人間の心を貧しくしているように思えます。今こそ、人間を超えた「仏智」を頂き、仏さまの恩を知らせてくれるこの伝統ある「報恩講」の大切さを思うことでもあります。

第十一組 長寶寺 中山順雄

研修会報告③

「カルト問題研修会」報告

講師 瓜生 崇氏
(京都教区 玄照寺住職)

第1回 8/31 会場…富山東別院会館
第2回 9/5 会場…第12組 本傳寺

二十代前半、友人に誘われて「親鸞会」の集会に行ったことがある。

会場内の陶醉したような異様な雰囲気にはいたたまれなくなりました。以来「親鸞会」は悪となった。また、先日、別院や本山にもよく足を運び法話会にも熱心に通っていたおじいさんが「親鸞会」の勉強会に通っていると知らされ「まさか」と思った。何故なのか理解できないまま、私はおじいさんに裏切り者、悪人というレッテルを貼ろうとしていた。これは、得体の知れない者に対して自分の勝手な思い込みや決めつけで不安や怒りを膨らませ、相手を敵に作り上げている自分の姿である。



講師の瓜生氏

講師が「親鸞会」の内側を卵の黄身と白身の喩えを使って説明した。

教団の問題の多くは核(黄身)となる幹部にある。一般の信者(白身)の多くは真面目に仏法を聞きたいという思いを持って集まっている人たちだ。だが、彼らにとっては、核(黄身)となる幹部から与えられた教えだけが「正」の教えであって、それ以外は間違っている、というものだった。つまり、彼らも自分たちの教えが絶対であって他は敵なのである。どこか自分と似ている。

「お互いの正義を振りかざして、正義と正義の論争をしてもお互いがかたくなになり更に武装するだけの意味がない」という講師の言葉。納得である。一方的に相手を悪の権化にし、自分の正義を押しつけるような方法では相手の心はほどけない。自身、カルトに対してはどうしても感情的で批判的な攻撃になる。しかし、結局、それはお互いの押し付けだけに終始し、空しいものになる。

真宗僧侶である我々は、カルトの問題には適切に対応できる術、心構えを心得ておくべき立場にある。その意味では、カルト教団の活動実態や問題点は知っておくべきであろう。と同時に、最後に「我々は我々としてしっかり聞法の場を作り、我々自分自らが先頭に立って仏法を聴聞する姿勢を見せていくことが肝心です」と結ばれた講師の言葉を忘れてはいけないと思った。自身の真宗僧侶としての姿勢を問われた思いだ。カルトの活動や問題に対して、我々が真宗僧侶として果たしていくべき責任とは何なのかをしっかりと考えていかなければならないと思う。

第九組 光圓寺 安川 潤

* * *

八月三十一日と九月五日に東別院会館と黒部市本傳寺を会場にして「カルト問題研修会」が開催された。今回の研修会開催の大きな引き金となったのが上市町横越の浄土真宗本願寺派の観勢寺が親鸞会に譲渡されるという事件である。

そういった経緯から講師には、浄土真宗親鸞会講師部にて布教活動に従事経験のあった瓜生崇氏を迎えて講義を頂いた。御自身の経験を踏まえての話を聞く中で私自身の中にあっ



本傳寺での講義の様子

たカルトに対する思いというものが覆された。私自身カルトということに対して積極的に取り組めておらずカルトはなんとなく怖いものという認識しかなかった。

今回の講義の中でカルトの大きな特徴として言われたのが、カルトとは個人の自由と尊厳を奪い、目的達成のためには違法行為も辞さない集団であるということだ。

またカルトの見分け方として六つの項目を挙げられた。

- 一、正体を隠す
 - 二、不安を煽る
 - 三、法外な献金
 - 四、指導者への絶対服従
 - 五、信者への虐待
 - 六、脱会の自由がない
- という点だ。

瓜生氏がおられた親鸞会においては脱会の自由を認めているが、脱会した人は「人生の敗北者」であるとし実質的には脱会を認めていない。

次に親鸞会の内情をゆで卵を例えにして説明して頂いた。教団内部は二分化されていて、卵の外側部分つまり白身にあたる部分に属する人は純粹な信仰心(学びの意識)を持つ人たちで、卵の内側部分つまり黄身の部分に属する人が先に挙げた違法行為も辞さない人たちである。そういった理由から親鸞会に対する批判を白身部分の人に投げかけても理解されにくいということを挙げられた。

今回の講義を受けカルトの脅威がすぐ傍までできている今、寺族の一人一人の学習・意見交換が必要だと感じた。

第十一組 常徳寺 北條智秀

* * *

北陸地方の「土徳」とは、何百年もの歳月をかけて培われた真宗の風土です。子々孫々と伝えられてきた念仏の教えが、生活の規範として今でも残っています。このような心豊かな人情厚き土徳の土地には、都会と違ってどのような宗教でも種を蒔けば必ず芽を出すと言われています。私の育った飛騨白川郷でも昭和五

十六年十月二十八日に宗教殺人が起こりました。真宗の教えを語る異安心の教団が事件を起こしました。記憶している人も多いと思います。

石川正穂師・瓜生崇師の講義を通して、カルト問題は身近なことであり、決して避けて通れない重要な問題であると認識いたしました。

今後この様な研修会に積極的に参加してカルト教団から御門徒の方をお守りできればと思います。今まさに教区が一丸となってこの問題に対処しなければ、必ずこの先、憂いを伴うことは明らかです。目覚めましょう。

第十三組 光昭寺 藤條法彰



別院会館での講義の様子

富山教区仏教青年会からのお知らせ

富山教区に仏教青年会が発足して三年が経ちます。本会は、親鸞聖人が身をもって証してくださった念仏の教えのもと、寺院の者に限らず、職業や性別などの垣根を越えて共につながっていききたいという思いを大切にしながら活動しています。

今年度は、九月七日に輪島で行われた「北陸連区ソフトボール大会」に参加しました。ちなみに富山教区は六チーム中二位でした。また八月二十一日には富山別院を会場として、晴雲幼稚園の園児さんによる歌や踊り、お菓子釣りや輪投げといった遊び。そして、切り出した竹に灯りとメッセージを飾り、自分と他者を感じてもらおう「一期一灯会」を催しました。その他に、若坊守会さんとの共同学習会や上田泰子さん（第十組西源寺）主催の映画『みんなの学校』上映会への協力などがありました。今後は『大無量寿経』をテキスト

にしての学習会を辻明浩さん（第二組明源寺）を講師として行います（第一回は一月二十三日に開催しました）。また清沢満之を中心とする近代教学の現代における意義を尋ねる学習会を、教学研究所研究員の名和達宣なわたちゆきのりさんを講師にお迎えして行います（四月二十日予定）。また「他教区交流会」（五月二十二日・二十三日、金沢にて）が予定されています。

まだまだ未熟で、暗中模索な会です。随時寺院の方ももちろん、寺院外の方の会員を募集しています。また、いずれの活動につきましても会員に関係なくご参加いただければ幸いです。より一層の充実に向けて、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いたします。

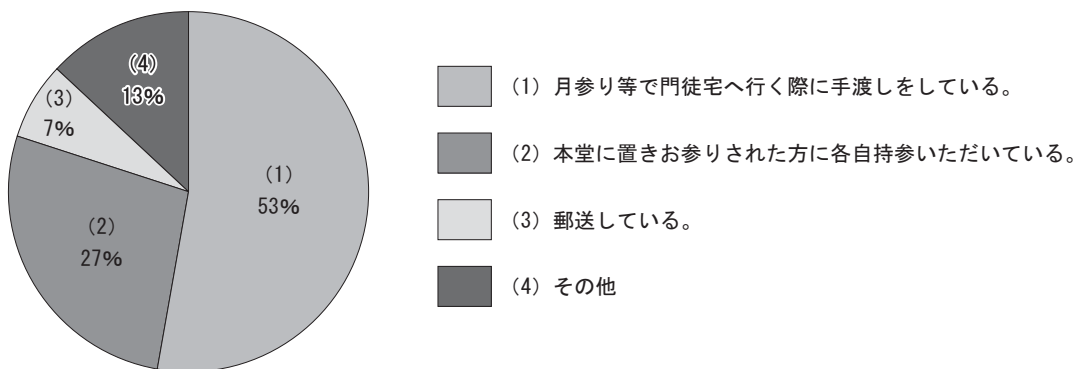
富山教区仏教青年会 代表
第十二組 本傳寺 渕上 知明
代表連絡先 携帯〇九〇一二二九一七五九

『同朋新聞』配布方法のアンケートの集計について

先般、ご門徒の方から『同朋新聞』について、各寺院でどのように配布されているかというご質問をいただきました。

つきましては、各組巡回の際に実施しましたアンケートの集計結果を掲載いたします。

【アンケート設問：『同朋新聞』の配布方法についてお聞かせ下さい。】



着任のご挨拶



富山教務所書記 高志 充哉

このたび、十

月三日付で富山教務所書記を拝

命いたしました。

佐賀県伊万里市で生まれ育ちましたが、かつて『高志(越)の国』と呼ばれたこの地にご縁をいただいたことは、まことに希有なことであり、ありがとうございます。

私はこれまでいくつかの部門を経験しましたが、前任地で「これまでもがこれからを決めるのではない。これからがこれまでを決めるのだ。」(藤代聡磨)という言葉をもって送っていただきました。この言葉をかみしめ、これから富山の地で歩みたいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

教区だより

(敬称略)

得度式受式

(二〇一六年七月一日〜十二月三十一日)

二〇一六年八月四日

第十一組 光顕寺 種昂しのぶ

第十三組 常光寺 桑守 美穂

二〇一六年八月七日

第十一組 淨信寺 柴田 琴子

第十一組 淨信寺 柴田 鼓己

第十三組 西心寺 田中美代子

第十三組 西心寺 田中 慶音

二〇一六年十一月七日

第十組 西源寺 上田 泰子

住職任命

(二〇一六年七月一日〜十二月三十一日)

二〇一六年七月二十八日

第十組 寶藏寺 藤谷 亮一

二〇一六年九月二十八日

第九組 深妙寺 田邊 正徳

第十組 福恩寺 加藤 義博

二〇一六年十二月十三日

第十組 徳蓮寺 遠藤 俊睦

第十三組 光榮寺 井口 賢昭

教務所人事異動

富山教務所書記 辻本 怜

願により役務を免ずる

二〇一六年九月三十日付

総務部書記 高志 充哉

富山教務所書記に任命する

二〇一六年十月三日付

教化日誌

(二〇一六年七月一日〜十二月三十一日)



7月

- 1日 全国教務所長会
- 5日 全国教区会正副議長会
- 6日 全国教区会正副議長会
- 7日 全国教区門徒会正副会長会
- 8日 若坊守学習会
- 11日 組織拡充小委員会
- 12日 声明作法講座
- 13日 割当審議委員会
- 15日 教化委員会総会
- 19日 教区会参事会・教区門徒会常任委員会
- 20日 青少幼年スタッフ会

8月

- 26日 教区会(通常会)
- 27日 声明作法講座
- 27日 教区門徒会(通常会)
- 29日 サマーキャンプin富山(〜31日)
- 29日 富山別院暁天講座(〜31日)

- 1日 戦死・戦災死者追弔法要 (八一法要)
- 2日 正副組長会
- 3日 正副組門徒会長会並びに研修会
- 8日 第五十六回児童研修大会(〜9日)
- 9日 声明作法講座
- 18日 児童研修大会反省会
- 19日 社会教化小委員会
- 21日 『如大地』編集委員会
- 22日 一期一灯会
- 22日 「みんなあつまれ おてらにとまろう(富山小会主催)」(〜23日)
- 23日 坊守会連区事前学習会
- 23日 第十三組組会
- 24日 解放運動推進協議会
- 24日 門徒研修小委員会
- 25日 声明作法講座
- 25日 第十三組組門徒会
- 26日 教区同朋の会臨時総会
- 26日 大谷大学同窓会公開講座
- 27日 共学研修会
- 27日 第十一組組会
- 29日 「戦争展―遺品が語る沖縄戦―」(〜28日)
- 29日 第九組組会
- 30日 第十一組組門徒会
- 31日 カルト問題研修会①

9月

- 1日 第十二組組会

【瓜生 崇氏】

【藤島建樹氏】

- 2日 第九組組門徒会
- 5日 カルト問題研修会② 【瓜生 崇氏】
- 6日 第十組組会
- 7日 北陸連区ソフトボール大会 (能登教区)
- 8日 第十二組組門徒会
- 9日 儀式作法講習会
- 12日 富山教区保護司会
- 13日 『如大地』編集委員会 声明作法講座
- 14日 北陸連区坊守研修会 (～15日) 【沼 秋香氏】
- 15日 ご命日のつどい 【測上知明氏】
- 16日 若坊守学習会
- 20日 第十組組門徒会 組門徒会・同朋の会合同研修会 相続講員物故者追弔法要兼彼岸会 (富山小会主催)
- 21日 あいあう会・解放運動推進協議会
- 26日 富山別院彼岸会 (～23日)
- 26日 北陸連区推進員交流研修会 (～27日)
- 27日 声明作法講座
- 29日 式支配所係役会・助音方習礼
- 10月
- 5日 北陸連区駐在懇談会
- 6日 富山別院報恩講 (～8日)
- 11日 第二十四回真宗同朋の会全国交流研修会 (～13日)
- 13日 北陸連区教務所長・次長・主計会 (～14日)
- 15日 ご命日のつどい 【立白法友氏】
- 17日 『如大地』編集委員会
- 20日 全国主計会 (～21日)
- 11月
- 1日 全国駐在教導研修会 (～2日)
- 11日 教区同朋の会報恩講

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(二〇一六年七月一日～十二月三十一日)

《住 職》

- 第十三組 光榮寺 住職 井口 榮 樹氏 八月八日寂
- 第十組 徳蓮寺 住職 遠藤 尚 俊氏 八月三十日寂
- 第十三組 長願寺 住職 梅 澤 一 映氏 九月十四日寂
- 第十一組 圓滿寺 住職 菊 嶋 慶 雄氏 十二月十一日寂
- 《前坊守》
- 第十一組 常念寺 前坊守 松 田 須 美氏 九月二十一日寂

- 14日 教区教化委員会代表者集会 (～15日)
- 15日 ご命日のつどい 【見義智証氏】
- 20日 真宗本願両堂等御修復後奉告法要 (～21日)
- 21日 真宗本願報恩講 (～28日)
- 27日 富山教区真宗本願報恩講団体参拝 (～28日)
- 富山別院宗祖親鸞聖人御正忌法要 「ご満さん」(～28日)
- 12月
- 1日 社会教化小委員会
- 2日 若坊守会
- あいあう会
- 解放運動推進協議会
- 子ども報恩講
- 5日 北陸連区教区門徒会正副会長会 (～6日)
- 6日 『如大地』編集委員会
- 7日 北陸連区駐在会
- 8日 教区坊守研修会
- 共学研修会
- 12日 第三回門徒戸数調査に向けた説明会
- 13日 解放運動推進協議会公開講座
- 【芹沢俊介氏】
- 15日 ご命日のつどい 【大中臣冬樹氏】
- 16日 岐路に立つ寺院と映画『土徳流離』に真宗門徒の原点をたずねる 【太田浩史氏】
- 19日 寺族研修小委員会
- 准堂衆会
- あいあう会
- 20日 部落問題講演会(富山解放連)
- 21日 北陸連区駐在研修会(～22日) 【安田 聡氏】
- 22日 『如大地』編集委員会

編集後記

『如大地』第140号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

『如大地』第一四〇号発行に際し、お忙しい中原稿をお寄せ頂きました皆様ありがとうございました。お陰様で無事発行することが出来ました。あるテレビ番組で作家でもある瀬戸内寂聴氏が本を出版するにあたり「私の言いたい事の半分も書いてない」と言われたのを聞いて、驚きとともに少しホッと、また励まして頂いたような気持ちになりました。自分の思いを言葉にし、書くという事は案外難しいのです。しかし、書く事によって自分自身を整理し、また改めて気付かされる事もあるように思います。

さて、私自身『如大地』編集委員に加えさせて頂き一年半になります。各組の委員の方々にはいろいろ教えて頂き良い刺激を受けております。今後よろしくお願いいたします。

砂谷知昭